

# 1 ライフステージに応じた切れ目ない相談・支援の実現に向けて

発達特性がある子ども・若者の支援に携わる皆さんに向けて、群馬県の障害政策を所管する担当課からメッセージを寄せていただきました。 <群馬県障害政策課精神保健室>

## ■ 発達の特性を早めに理解し、適切に対応していきましょう。

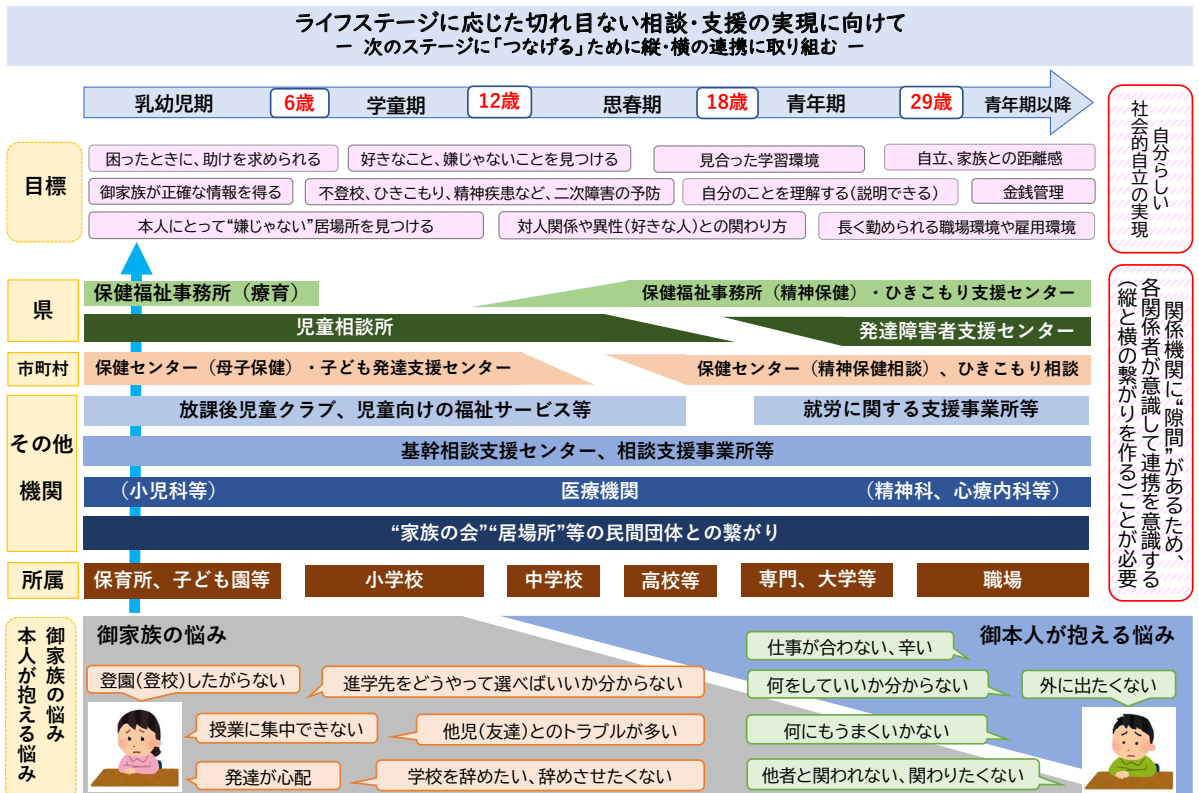
発達障害に対する支援は御本人のライフステージに応じて様々な支援機関がありますが、その対応には役割としての業務、できることが決められています。

それは、支援内容や対象年齢、専門機関としての特徴などが挙げられます。ですから支援者がやってあげたくてもできないこと（限界）があります。

環境調整（特性を持つ子どもが過ごしやすい環境を用意する、周囲の大人がその子どもにとって、より良い関わり方で接する）が早い方が良いのは言うまでもありません。一方で、本人に考えていただいたり何かしら行動していただいたりする場合には、当事者の成長を待つ必要があります。

例えば、支援者（相談員、学校の先生など）が、目の前の子どものために、いろいろと教えようしたり学ばせようと一生懸命に取り組んでいる事例があるとします。それが功を奏する場合もあるでしょうが、その子どもの受容する能力を超えるような関わり方をしてしまうと、本人にとっては“大人は嫌なことをさせる人”という認知が定着してしまう可能性があります。そうってしまうと、その子の今後の人生にネガティブな影響が出ることも考えられます。

つまり、その子どもが耳を傾けたり、納得できたりするタイミングを待つ必要があるということです。それは数ヶ月先、あるいは数年先の可能性もあります。ですから、発達障害に対する支援は、本人のライフステージを見据えた長い目で、多角的な視点で関わり続けていくことが必要になります。



## ■ 支援機関（学校、相談機関、行政機関等を含む）の役割を正しく把握しましょう

「連携」とは、他支援機関に役割を委ねるということではなく、お互いに苦手なところ、できないことをフォローして支え合うことです。そのために当該機関の役割と限界を把握し、他機関についても同様の理解をした上で連携を考えていくことが重要です。

例えば、他機関との連絡、調整をしないで「あそこの〇〇なら△△をしてくれるはず」と御家族に紹介した結果、「結局△△してくれなかった。全然こちらが求めたことをやってくれない！」という思いをされたことはありませんか。支援者として、つなぎ先にこちら側の支援の意図（見立て）を直接伝えたでしょうか。

支援の意図を理解していない相手方からすると、「今のこの子には〇〇が優先、必要な支援だ」等と一生懸命考えた結果だったりします。それを防ぐための「連携会議」等も考えられますが、支援者から相手方に電話を入れたり、タイミングを見て出向いたりする対応も考えられます。

## ■ 支援を補完し合うために「他の支援者・機関との横の連携」も考えていきましょう

“連携慣れ”していないと他機関と連絡、調整することに一歩引いてしまいがちですが、日頃から「お互いのできることで苦手なことを情報共有しましょう」という共通認識を持っていると、そのように緊張したり不安になる場面が少なくなります。情報共有の目的を持った関わりを増やすことで、目の前の子どもを支える“横のつながり”ができやすくなります。

## ■ 今はまだ支援のタイミングではないと判断したら、次（縦）の機関との連携を考えましょう

その時の目の前の子どもは何が課題なのか、いずれどういうことを目標にすべきなのか等、という意識はどのライフステージで関わる支援者も意識しておくといよいでしょう。

また、本人の課題だけでなく、強みや魅力的な側面等、ポジティブな部分を意識した方が、より良い支援に繋がります。よく支援ファイルや指導記録等に情報を記載することがありますが、特性のある子どもに対して丁寧に切れ目ない支援を実施するのなら、紹介する機関に支援者が出向き直接話をすることも必要です。

また、支援がつながった機関から前の支援機関へ問い合わせることも大切です。受け取った情報を生かそうという意識を持って連絡を取ることで、支援者同士の顔の見える関係づくりにつながっていきます。

支援をしていると、本人や御家族から「前の〇〇さんは、もっとこうしてくれた」等と言われ、辛い思いをしたことはないでしょうか。その場合には、躊躇することなく以前の機関にどのように対応されていたのか、どういうところがポイントだったのかなど、問い合わせてみましょう。

連絡をもらえると以前関わっていた支援者も嬉しいものです。きっと一緒に悩んだり考えてくださったりすることでしょう。それが“縦のつながり”を生み出してくれます。

## ■ 御家族のために、支援者同士で互いに助け合って支えていきましょう

支援が必要な子どもにとって一番の支援者は誰か。

「親御さんはじめとした御家族」と言えないでしょうか。

特に一番身近な支援者である親御さんは、嬉しいことや楽しいことを子どもと一番身近で共有できる一方で、大変な思いも同じようにされています。

不安や孤立感に押しつぶされないよう、私たち支援者は、御家族をはじめとした他の支援者を支え、皆で助け合っていくことが必要です。